

瀬戸内・四国地域の 観光地域創生プロジェクト

せとうち観光専門職短期大学
安村 克己 学長



香川大学
原 直行 副学長



【内田】

私はファシリテーターを務めます、せとうち観光専門職短期大学 観光振興学科長の内田と申します。

こちらが、せとうち観光専門職短期大学学長の安村克己でございます。

【安村】

香川大学 副学長の原直行先生に本学においでいただきました。今日は大学教育と地域連携について、お話を伺わせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

【内田】

今回の対談相手は、香川大学 副学長の原直行先生です。よろしくお願いします。

【原】

香川大学 副学長の原です。産官学の連携担当であると同時に、経済学部教授でもあります。経済学部では観光学や地域活性化のことを研究し、授業でも

観光や地域活性を説明しております。本日は同じ観光を専門にする安村先生とのお話ということで大変楽しみにしております。よろしくお願いします。

【内田】

今日は3人とも大学の教員ですが、この対談を見ているのは、高校生の方も一般の方もおられると思います。そこで、最初に原先生のご専門について少しご紹介ください。

【原】

私の専門は、観光学とそれから地域活性化論の研究になります。

元々は農業のことを経済学的に分析する農業経済学からスタートしましたが、その後は農村の観光であるグリーン・ツーリズムの研究に変わりました。それで、グリーン・ツーリズムから地域の色々な観光全般のことをやることになりました。瀬戸内国際観光芸術祭の研究もやっております。それから観光を通じた地域の活性化についても研究をしております。大きくいうと、観光学と地域活性化の研究になります。

【内田】

ありがとうございます。

現在の香川大学の観光分野の取り組み、および地域連携の取り組みについてご紹介ください。

【原】

経済学部が中心的に観光学をやっております、観光学の教員が現在5人おります。どの先生も、それぞれ専門分野が異なっていて、社会学、人類学、経済学、あるいは都市計画という教員がいますが共通しているのは、研究室の学生を引き連れて、主に香川県内の色々な地域でフィールドワークを中心に学生の教育と研究をしているところが共通していると思います。

具体的に言えば、せとうち観光専門職短期大学がある屋島の山上で毎年夏に開催しているイベント「TERASU」が有名です。学生たちが讃岐提灯を模した提灯で照らして、夜に屋島の山上でカフェを開いて、お客さんがカフェを楽しみながら、屋島から見る高松の夜景を楽しむという活動をやっています。

【内田】

ありがとうございます。

それでは安村学長から本学の特徴、地域連携等をご紹介ください。

【安村】

本学は、せとうち観光専門職短期大学と申します。設置認可を受ける時に、「観光」をつけたり、「専門職」をつけたり、「短期大学」をつけたり、色々

と付け足しているうちに、大学名がどんどん長くなりました。我々は「せと短」という名称で、できるだけ本学の名前を外部に広げようと思っています。開学して5年目になります。ちょうど2021年コロナ禍の真っ只中で開学しました。観光がダメージを受けたせいもあるかと思うのですが、開学以来、学生募集に苦勞しております。ただ、当時から入学してくれた学生は観光に大変意欲のある学生たちでしたので、我々も非常に教えがいがあり、学生と厳しく、楽しくやって来ました。それもあって、そろそろ本学の文化みたいなものも出て来たのかなという感触があります。

ただ、ここに来てもう一度「大学教育とは何なんだ」と、そこから見直そうと考えております。今日は原先生に大学教育について、それから先ほどお話にありました地域と学生・教員との関わりについて、色々と勉強させていただきたいと思います。

【内田】

本学について少し補足すると、これは専門職大学であればどの大学でも必須なのですが、臨地実務実習、本学の場合でしたら15日間・30日間・30日間、長期に観光の現場で働いて観光を学ぶという実習があります。

臨地実務実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲとあるのですが、臨地実務実習Ⅰが香川県内の観光現場、特に地域創生に関連する実習です。臨地実務実習ⅡとⅢは就職がございしますので、地域創生だけでなく、宿泊、航空、鉄道の4つの分野の現場で実習をしています。国立大学とはちょっと違う、専門職の大学ならではの取り組みをしています。

【原】

面白いですね。ちなみに3週間の実習に行くと何単位とれるのですか？

【内田】

3週間で4単位です。

【原】

6週間行くと8単位ですか？

【内田】

はい、そうです。

【安村】

先に申し上げた臨地実務実習というのは三回ありまして、臨地実務実習Ⅰは15日間です。それからⅡが30日間、Ⅲが30日間になります。

【原】

実習は1年生、2年生、3年生で行くのでしょうか？

【安村】

1年次と2年次で行きます。本学はクォーター制を採用しておりますので、2年次の第2クォーターと第4クォーターが、臨地実務実習ⅡとⅢになります。先ほど申し上げたように、大学教育として地域との関わりにシフトしていこうと、学内で議論をしている最中です。観光地域創生を中心にしてはどうかと考えています。

【原】

安村先生がおっしゃっているのは、もっと地域に学生たちを送り込みたいということですか？

【内田】

専門職大学なので、学術で学んだことを実践するときに、学術と実践のつながりで非常に分かりやすいものは地域創生なのではないかと考えました。

【原】

観光だけにとどまらず、観光と地域創生は良いですね。

【安村】

今は地域振興と観光はもうほとんど不可分で、切り離せないような関係にあります。今、DMOが観光地域づくりをやっていますが、おそらく原先生も同じ考えだと思いますが、私は本来、地域住民が主導となり地域全体で取り組めるようなまちづくりが良いのではないかと考えています。

【原】

賛成です。

その場合、せとうち観光専門職短期大学を卒業した学生の皆さんを、地域の住民主体の観光地域づくりのリーダーシップを担っていけるような人材として養成して行くということでしょうか？

【安村】

おっしゃる通りです。そこが問題でございまして、卒業した後にどういう職業に就くのかというと、それに対応するような職業が今のところないんですね。地方自治体なども地域振興に力を入れていますし、また観光振興にもだいぶ注目していると思うのですが。

先ほど内田先生から少し説明がありました鉄道と航空と宿泊ですね。これも各業界が非常に地域に力を入れています。ところが、日本の企業はジョブ型では学生を採用しませんので、本学のこんな良い人材なのですが、なかなか採用してもらえません。

地方自治体にも特別枠を作ってくださいと今言っているところです。

【原】

それは大賛成です。
地方自治体の観光協会が、
DMO に上がるパターンが
大部分だと思うのですが、
それで自ら本当に観光の専
門人材を養成するかとい
うと、必ずしもそうでは
ありません。香川大学も実は



「リカレントをやりませんか」ということを結構言うのですが、やはり予算的に厳しいと言われて。でも、観光は専門人材が大事だと思っています。
こんなに伸びている産業って、日本ではもうないんじゃないかっていうぐらいに伸びていて、これからも十分期待できると思います。

私は今、国際協力機構 JICA の研修の受け入れを行っていて、香川県で3週間、発展途上国の皆さんが来て観光の研修をします。それぞれの国の、日本でいう観光庁の役人か県レベルの観光マーケティング担当者なのですが、専門人材で雇われていて、だいたい7、8割ぐらいの方は観光の修士号を取得していて、1割ぐらいの方は博士号まで持っていて、残り1割ぐらいの方が学士号という感じなので、本当に日本との差を感じてしまうんですね。

【内田】

どこの国から来られるのですか？

【原】

途上国と言いつつも、一番大きいのはエジプトですね。グランド・エジプシャン・ミュージアム（「大エジプト博物館」）に JICA がすごくテコ入れをしているっていうのもあって、あとはアフリカではジンバブエとかですね。

それとヨーロッパでいうと、バルカン半島ですね、ボスニアヘルツェゴビナとかアルバニアとか、あとはアジアと中米の方はキューバとか、セントクリストファー・ネイビスとかですね。人生で初めてお会いしました、みたいな。

【安村】

そういう JICA の事業でやって来られる方たちは、修士号や博士号というのはどこで取得されているのですか？

【原】

大体それぞれの国で取得されている方が多いですね。中にはアフリカでフラン

ス語圏だった人なんかはフランスに行って取っているとか、アメリカで取っているという人たちもいます。ですが、基本は大体自分の国ですね。

【安村】

大体皆さん英語は達者で？

【原】

JICA は研修生としての参加の条件が、英語ができるっていうことになります。

【安村】

私も一度 40 年前に、インドネシアに JICA で派遣されましたが「英語は 1 番上のレベルで設定されているから覚悟しとけよ」と言われました。

【原】

今は一応コーディネーターとして通訳の人もついてくれます。私もあらかじめ原稿があれば話せますが、その場でディスカッションになると、日本語を英語に考えてやっていたら言いたいことの半分も言えないので、そこは通訳の人に入ってもらって日本語で説明をして、通訳してもらうということをやっています。

【内田】

穴吹学園も JICA で 3 週間引き受けています。せとうち観光専門職短期大学にも、半日だけですが研修で来られています。

【原】

JICA の研修は、香川大学では医療分野は割と積極的に受け入れてるのと、日墨研修といってメキシコの人たちを 10 ヶ月ぐらい受け入れるというのは経済系がやってますね。

【安村】

私は観光の研究を始めてもう 30 年ぐらいになります。30 年前はそれこそアフリカの人たちが観光の専門職になるための勉強にヨーロッパに留学に来るのですが、彼らは「観光が楽しみを目的するため」という観念、概念がなかったらしいですね。要するに、観光は自分たちが稼ぐための事業だということですね。受け入れたヨーロッパの教育機関の方が「観光というのは何なんだ」という概念から教えなければいけないということがありました。でも今は全く時代が変わりました。

【原】

産業としての観光ということを強く考えて。



【安村】

特に人類学なんかはそうだったのですが、要するにあのヴァレン・スミスが執筆した『ホスト・アンド・ゲスト』という本が出版されました。私も随分なるほどと思いました。要するに我々は観光を考えると、ゲ

ストである観光客のことばかり考えます。ですが、人類学の人間にすると、未開の部族たちのところに観光客がどこどこ入ってくる現象が起きてしまい、ホストである原住民が、それとどういう風に接触するのかというところから、人類学は観光研究を始めたらしいんですね。私も、なるほど『ホスト・アンド・ゲスト』か、それに 30 年前にようやく気がつきました。

原先生は学生の頃から観光を研究されていたのでしょうか？

【原】

いや、とんでもないです。私は農業経済というか農業経済史だったので、博士論文は秋田県の地主・小作関係で書いているんですよ。

香川大学には経済史で教員として採用されて、それでイギリスに一年間留学する機会をいただいて、最初はイギリスに農村景観の歴史を勉強しに行こうと思っていました。イギリスはフットパス（「歩くことを楽しむための小道」のこと）が非常に盛んですよね。英語がわからなかったのでフットパスの地図を買って、もうひたすら歩きました。農学部だったので、何を栽培してるのかが大体分かるので、地図上に書き込んでいきました。2、3ヶ月ごとに同じコースに行くと作物が変わっていきるので面白くて、その時にルーラル・ツーリズムの中のグリーン・ツーリズムが面白いなと思いました。日本に帰ってから研究をがらりと変えて、グリーン・ツーリズムの研究を始めていくことになりました。

【内田】

イギリスは、どの大学に？

【原】

レスター大学です。そこにある「地方史研究センター（Center for Local History）」は、イギリス農業史研究のメッカの一つなんです。

【安村】

原先生は東京のご出身で、高知の四万十川で調査を？

【原】

そうです。自分の研究スタイルがアクションリサーチといって、研究としてはマイナーな分野になります。基本的に研究者は自分たちの客観性をどう保つかということが大事だと思います。ですが、アクションリサーチはその真逆で、自ら現場に入って行って現場の人たちと一緒に動かし、それでどう変わっていったのかを調査するスタイルです。

グリーン・ツーリズムは今でもそういうところが多いのですが、赤字の経営体が多いので、それで「なぜ赤字なんだろう」と思っていました。ところが調査をさせてくれるところは黒字のところばかりですから、なかなか赤字のところを分析させてくれなくて、それで親しかった四万十川の流域の自然体験と宿泊をやっている施設の人にお願ひしました。1年間研究のためにサバティカル休暇を取って、四万十川のそこに半年住み込んで、カヌーのガイドをやりながら、経営改善をスタッフと一緒にやったんですよ。

【安村】

アクションリサーチですね。

【原】

今でも年に3、4回ぐらい行って、カヌーをしたり、時にはお客さんを案内することもあります。

【安村】

それ以来、四国にいらっしゃるのですか？

【原】

1998年に香川大学に就職が決まってからずっとです。

【安村】

そうするともう30年近くですね。

【原】

そうです。大学の中ではもう結構重鎮になってきました。

【安村】

私は原先生の論文は随分拝読しております。瀬戸内国際芸術祭から地域連携まで、たいへん素晴らしいです。私も瀬戸内国際芸術祭の論文をちょっと書いてみましたが後から先生の論文を読ませていただいたらこれはダメだなと、やめてしまいました。

【原】

いや、とんでもないです。

【安村】

その地域連携ですね。先ほどの四万十川のお話を聞いても、まさにアクションを行って、どんどん地域に入っておられる、そういう研究姿勢が思い浮かんだのですが、色々なところに行かれていますか？

【原】

そうですね。でも、関係が深いのは四万十が一番だと思いますね。去年は4回行って、全部で10泊ぐらいしていると思います。行くところはいつも一緒ですけど。今でも「もっとこういう風にした方がいいんじゃない」とか、経営の相談に乗ったりしています。

【内田】

その四万十の団体はNPOですか？

【原】

一般社団法人 四万十楽舎というところです。1999年からできているところですが、当時はNPOだと創りづらかったらしくて、廃校になった小学校を宿泊施設に変えたんです。

【安村】

香川大学で先生のやっておられることを教育中心に伺いたいと思います。地域に色々と展開されたということもありますし、色々な語り口があると思いますが、大学教育としてはどのような方向を原先生が目指しているのかをお話してください。

【原】

私自身がアクションリサーチといって、研究者も自ら現場に飛び込んで研究するというスタイルです。やはり学生も教室で勉強しているだけでは身につかないというのは本当に強く思っています。



教室での勉強も大事ですが勉強したことを社会に出て、実践して初めて勉強した意味が分かるということですし、勉強したことよりも、ずっと現場の方が先に進んでいるのではないかとということに気がついて、勉強したことを現場に色々

適応して行って欲しいと思っています。それで今研究室の学生が大体1学年10人いるのですが、二人一組で県内の色々なフィールドに入らせてもらって、そこで地域の人たちと一緒に課題解決をしていくということをやっています。最近は割と観光を使うパターンも多いのですが、国も注目している「関係人口」といって、交流人口よりも地域と関係が深い人たちをどう作っていくかということがあります。「関係人口」づくりのところで、地元の自治体さんから手伝って欲しいと言われることが多いので、そういうところに学生と入ることが多いですね。やはり現場に入って学ぶことが大事で、アンケート調査の仕方を教えても、結局現場で実際にアンケートを取ってみないとわからないですから。

【安村】

おそらく今の話だと、原先生のお名前です。それこそ現場の方からどんどん学生をお願いしますということだと思いますが、最初のうちは先生がセッティングされていたのですか？

【原】

そうですね。実は、地域に入り出したのは、2007年ぐらいからなんです。2003年にイギリスに留学して、帰ってきてグリーン・ツーリズムの研究を始めるのが2004年でその頃からなんです。その頃に香川県内でも最初に一緒にやらせてもらったのは、塩江の一番奥の上西（かみにし）地区の方だったんです。廃園になった保育園を拠点施設に変えて、そこでいろいろ交流をしたいということで、地域の人たちも若い人たちを求めてくれて、そういうのが始まった頃だったんです。それがあつたので入らせてくださいというよりは「一緒にやりましょう」というパターンでした。

【安村】

いいですね。

原先生も偉くなられて、大学の管理運営の方で大変でいらっしゃると思いますが、まだゼミとかも持たれていますか？

【原】

はい。やっています。

【安村】

大学院でも教えられていますか？

【原】

大学院でも教えています。むしろストレスの捌け口というか、教育が楽しいので。

【安村】

いやもう色々なところで原先生のお名前が出てくるので。

【原】

私の方こそせとうち観光専門職短期大学の学生さんは活躍しているなと思います。例えば、徳島県の西阿波で有名な DMO の「そらの郷」でも実習されていましたよね。二人の学生さんだったと思うのですが、すごく熱心にやっていて、あの時の事務局次長だった出尾さんも二人を可愛いがっていて、毎日のように Facebook にアップされていたので、本当に素晴らしいなと思いました。

【安村】

あの二人は本当によくやってくれて、出尾さんにもずいぶん褒められました。「そらの郷」にもよくしていただいています。もちろん毎年実習に行っています。

【原】

実習期間は、3 週間とか住み込みですか？

【安村】

合計 6 週間ぐらいです。本当に実習は、観光地域創生に限らず、鉄道でも航空でも宿泊でも、最初は「この学生は大丈夫かな」と思っていますが、実習を経ると見違えるように変わってくるんですね。実習の力は大きいなと感じています。

先ほどの原先生のお話にも関わるかと思うのですが、座学でやることと、実習でやること、この二つをもう少しうまく結びつけられないかということを、今、学内全体で議論しています。

【原】

香川大学も同じです。本当にそこは大事ですよ。現場で感じたことや考えたことが、学問の中ではどのように扱われているのだろうか、こういう疑問が生じた時にどういう風に分析したら良いのだろうか、それが分からなかったら先生に聞きに行けば良いと思うんですよ。そういうことができるようになると、フィールドワークをやることと座学というのがうまく結びつくのではないかと思います。それは私たちの課題ですね。

【安村】

我々も社会的な評価は専門職ですし、「短大で大学教育？」と言われるようなところもあるのですが、そこを変えられるような取り組みができないかと考えています。私がそういうことを思いついたのは、アメリカのミネルバ大学からなんです。

【原】

キャンパスの無い、世界中を回って課題を解決しながらという？

【安村】

ミネルバ大学で徹底的に鍛えるのが、考える思考力を身につけさせることなんです。いくつか命題などがあって、それを覚えて利用して色々なケーススタディを現場で考える。あの通りにはできないと思うのですが、それを考えていくと結局リベラルアーツに戻ります。元々は自由七科というそのままでは使えないかもしれませんが、そういう基礎学力をあらためてフィールドワークや現場の実習と結びつけられないかなということを考えているんです。

【原】

フィールドで学生たちが疑問に思ったことを振り返って問うてあげるメンター、あるいは先生でもいいと思うのですが、そういう人たちって非常に大事ですよ。それを私もうまくできているかというと、正直自分でも自信がないんですが「あ、今この学生は何かを掴もうとしてるな」というのをフィールドで感じるのですが、そこをうまく引き出してあげること、それができた時に教育者としてちょっと貢献できたのかなと思います。

【安村】

話題を地域連携の話に移したいと思います。

原先生はもう 30 年近く地域に出て、フィールドに入って行かれているので、地元の方々と色々なネットワークを作られていると思います。

【原】

それが自分の一番の強みだと思っています。色々な先生から「こんなことをやりたいんだけど、誰か紹介してくれないか」と言われると、「僕が知っている限りあの人が良いと思う」みたいなことが言えて、連絡するとほとんどの人が話を聞いてくれるんです。それを築けたのは、本当に自分の財産だと思っています。私は香川県で研究したり、勉強することの良さはそこにあると思っています。人口 1300 万人の東京では、私一人がいてもいなくてもそんなに変わらないんです。ですが 90 万ちょっとの人口の香川県だと、私一人であってもお役に立てるのかなと。それは人口が少ないがゆえの良いところだと思うんですよ。

【安村】

やはり地域の社会関係と言いますか、人間関係も全然違いますか？

【原】

そうなんです。

【安村】

私は横浜でずっと育ちまして、大学も東京に行って、結婚してからもしばらく首都圏にいて、38歳で大学の関係で北海道の北見に行ったんです。そこで8年くらい仕事をしてから、三重県の大学に行ってそこで3年くらい、それから奈良に行って、奈良に10年ぐらいいたんですよ。それから大阪の大学で5年、それから高松市に来ました。

【原】

先生が、そんなに色々と点々とされてるのは初めて知りました。

【安村】

東京で40年近くいましたので、東京が「日本」だと勘違いしていたんです。ですが、北見に行ったらもう実際、人間の本当の豊さって何だと真剣に考えました。それで何を言いたいかというと、先ほどの先生のお話にもあった地域の大切さを、東京を出て知ったような気がしました。

【原】

今は逆に東京に本社があるような日本を代表するような大企業も、いかに地域に貢献するか、地域こそ課題が先進にあるんだとか、逆に地域はすごく注目されています。よく「課題先進県」みたいな表現もされますが、何かをやりたいと思う時に、地域こそ私は良いのではないかと思います。東京に行って埋もれるのではなくて、地域で自分のやりたいことをやる。若いと地域はすごく大事にしてくれるので、本当に希少な人たちだから大事にしてくれるので、そういうのはすごく良いなと思っていて。香川県内でもいくつかそういうところが出てきていて、若い移住者の多い地域が出てきましたよね。

【安村】

素晴らしいと思います。今回は原先生にお願いしていますが、この対談を通じて、地域の色々なキーパーソンとお会いして、あらためて私もこの香川の地域と関わっている人たちは素晴らしいなと思っているんです。

私も学長に就任して2年目ですが、最初は内部の大学の組織作りでもう汲々としていました。原先生にも早くご挨拶しなくてはいけないのに、すっかり忘れておりました。それで改めて3年目から地域の方々と少しずつ輪が広がるようになりました。地域に関する先生の業績を拝見してまして、もう到底追いつけないですが、そこを何とかしなければと思います。

【原】

実はゼミでもコンサルの人に来てもらって、月に1回、生成AI教室をやってもらっています。なんだかんだ言って最後は本当に人だと私は思っていて、い

かに魅力的な人間を作るかというのが大学の使命だと思っています。そのためには本当に犠牲を惜しまないというか、そういう風にしないといけないと強く思っています。

せとうち観光専門職短期大学の先生たちを見ていても、安村先生や内田先生のような学術の分野で大変活躍された先生たちも揃っているが、一方で私の知っている人だと阿部先生や石床先生、大熊先生、古川先生のような現場で活躍されている方たちもいて、そういうスタッフが揃っているのは羨ましいなと思っています。そこは本当に理想的で、安村先生がおっしゃったような学術とフィールドや地域社会の地域創生で、まさに活躍されている方たちとの結びつきができると、本当に理想的な教育が実現できるのではないかと思います。そこは逆に私たちの方こそ学びたいと思っていますところなんです。



【安村】

先ほど先生のお話であったように、魅力的な人間づくりということには私も非常に共感しました。この地域の良いところは、やはり魅力的な人が多いですね。まちづくりの成功の秘訣はやはり人だと思うことが

多いので、本学の学生にもそれを伝えたいと思っています。

【原】

観光学の研究の中では、おそらくまだそこまでオーソライズはされていないと思うのですが、観光ロイヤリティという研究分野があります。観光客が観光地に行った満足度は、他人にあそこは良かったよと言う「推奨意向」と、それから自分がリピーターとなる「再来訪意向」の二つがあります。その二つの意向が理想なのですが、これまでの観光学研究では、満足度が高くなることと、口コミなどで他人に推奨することの間には、正の相関があるとしています。

ただし、これまでの研究では自分自身がリピーターになるということとはあまり関係がないとされています。それでは何が効いているのかということ、リピーターになることの要素としては、その観光地の地域と観光客がどれぐらい繋がれたのかということだということがほぼ分かっています。それではその観光地との繋がりとは一体何かというのは、多分地域への愛着ということなんです。多分今の研究はそこぐらいまでいっています。

仮説でしかないのですが、私は、地域との繋がりを持てる、あるいは地域に愛着を持てるようになるというのは、おそらくその地域の人を観光客が気に入ったとか、好きになったとか、またこの人と会いたいということなのではないかと思っています。そういう人間を地域がどれだけつくれるのが、まさに地域創生と関わってくるのではないかと思っています。

香川大学でも、KBP「かがわ Bridge プロジェクト」と言って、東京の芝浦工業大学さん、それから津田塾大学さん、それから東京農業大学さんが夏休みをメインに、3泊4日で小豆島、善通寺、高松で合宿しながら、香川大学の学生と地域の課題解決に向けて取り組んでいます。東京の大学生たちがすごく喜んで来てくれます。地域の魅力をどう伝えるかの根幹にあるのはやはり人です。その人づくりをやれるのが教育機関だと思っています。

【安村】

観光客のリピーターがやって来るのは、観光地や地域の人の魅力だということは私もフィールドワークをした地域で思い当たることがあります。やはり訪問者が「〇〇さん、会いに来たよ」ということですね？

【原】

絶対そうです。

【安村】

そういうことがあって私もなんとなくそうだろうと思っていましたが、突き詰めて考えるとところまではやりませんでした。

【原】

四万十に毎年何度も行くのは、私が四万十を大好きですし、カヌーをやりに行くのですが、やはりその仲の良い人に会いに行っているんですね。四万十川で大満足したら、多分私は「じゃあ次は長良川にカヌーに行こう」とかになると思います。

【安村】

そうですね。我々がフィールドワークをやるのだって、そこに人がいるからです。おそらく先生はもうこの辺の地域でそういう方を色々ご存じで、ネットワークをつくられているのではないかなと思います。

【原】

本当に人間関係はとても大切にしています。本当に財産だと思うので。

【安村】

なかなか東京や大阪ではつくりにくいものがありますよね？

【原】

人が多すぎるがゆえに、というのがあっていいのではないかと思いますね。

【安村】

話が変わってしまうかもしれませんが、香川県の高校も偏差値が高くて、進学を売りにしてるところは結構外に出てしまうんですね。

【原】

香川大学もあまり相手にしてくれない。

【安村】

高校の先生とも何度か話をする機会があったのですが、やはり高校の知名度を上げるためには、大阪や東京あるいは京都の良い大学に行ったことが必要になって、そうすると我々はどうやって学生を特に香川県内の学生を確保できるのか？先ほどのお話も直接は結びつかないかもしれませんが、きっと地域の良さとか人の魅力になります。

【原】

おっしゃる通りだと思います。

香川大学も高校生と大学生の高大接続という事業をやっているのですが、経済学部の場合は金融について、高松第一高校などに行って、大学生が教



えるというようなことをやっています。それも非常に大事な活動だと思うのですが、もっと本当に面白い交流をしても良いのかなと思っています。

今「総合的な探究の時間」というのが高校にありますよね。実は探究の時間をどうやったらいいのかわからない先生たちも多いし、高校生もちょっとこうモヤモヤを持っているということで「たかまつ探究部」というのができました。瓦町の駅前で、テレワークオフィスを時々借りて、週に何回か色々な高校生が集まってきています。高校の先生だった人が、高校の先生を辞めて、その探究部の顧問になってやっているんですよ。こういうことを探究したいという高校生がいて、それをいきなり先生にお願いしちゃうと、ちょっとレベル差がありすぎるので、原研究室の学生さんに時々来てもらい「お兄さん、お姉さんとしてアドバイスをしてくれないか」と頼まれて、それ面白そうですねって言

って、今年から始めています。そうした形で、高校と大学とが連携していくというのも良いなと思っています。

【安村】

今のお話を聞いてもやはり、原先生に個人的に依頼が来て、先生がサポートするというそのネットワークは素晴らしいですね。

【原】

最近強く思うのですが、千人の人たちに訴えて千人を動かすってというのはかなり難しくて、大事なことは本当に一対一の関係で、一人の人が動くというところをどれだけ作っていけるのかが勝負ではないかと思うんです。それもあるので、大学生がたかまつ探究部の十人ぐらいの高校生のところに時々行って、話をして、アドバイスできることがあったらアドバイスをして、お兄さん、お姉さんとして慕われるみたいことが、本当に高校生十人と大学生二人とかそういう関係こそが実は大事なのではないかと思っています。

【安村】

実際、本学からも高校の探究授業には何人か行っています。過去にいた教員が行っていた高校では、たまたま教員の話にマッチングして、本学に進学してくれた学生がいたんです。本学に入ってくる学生は、やはり香川、あとは地域を良くしたいっていうのが出てますよね。

おそらくそれは香川大学の学生さんもいるのではないかと思います、学生さんは割と地域に残る方がいらっしゃるのではありませんか？

【原】

香川県出身の学生の場合は、香川県に残りたいという学生が多いですね。ただ香川県出身でない学生だと、例えば岡山県出身であれば香川に残りたいという学生もいるのですが、「岡山に戻りたいです」と言う学生もいます。

【安村】

そうですね。やはり地元になんか思い入れがありますし。

【原】

大阪でも、もちろん良いと思いますし、どこかの段階で帰ってくるというのもありだと思っています。東京や大阪に行って、頑張って三年間、あるいは十年でも良いのですが、頑張って力を身につけたから、故郷で恩返しをしたいので帰ってくるというパターンも全然ありだと思っています。

【安村】

私は大阪の大学には5年ほどしかいなかったのですが、結構四国出身者が多かったですね。小豆島も二人いましたし、坂出と徳島も何人かいたと思います。

やはり就職は大阪なんですよ。徳島出身の学生は「もう帰るつもりはありません」と、はっきりしていると思いました。特に小豆島の住民の人たちも若い人は「もう戻って来ないんじゃないかな」と諦めてるみたいです。もったいない話で、やっぱり仕事はないんですかね？

【原】

だから、起業したいというのは大事ですよ。頼もしい学生はいますね。私たちが若い頃は、起業しようなんてなかなか思わなかった。最近の学生はあまり外に行きたがらないと言いますが、良いところもたくさんあって、人に共感する力とか、環境に対する貢献をしたい学生は多分私たちが若い頃よりもずっと多い気がします。逆に私たちが彼らに学ばなければいけないことだなと思っています。

【内田】

原先生の周りの学生さんが、地域に関わるというのは公務員志向が多いということはあるですか？

【原】

多いです。今、経済学部で一番多い仕事は公務員なんですよ。大体四分の一が公務員になります。かつては三分の一が、銀行を中心とした金融機関でしたが、今は15%ぐらいです。就職としては一番多いのは公務員ですね。実際公務員になりたいというのは、地域に残りたいということもあるし、地域に貢献したいということもあるのだと思います。

【内田】

地域の国立大学の役割としては、地域に還元するという使命もありますよね。

【原】

そうなんです。特に最近は地域からも強く要請されています。私も5年ぐらい前までは学生の自由だと思っていましたが、これだけ地方で人が減って来ると、そうも言っていられない。本当に人がいなくなってしまうのではないかとこのころがありますので。

【安村】

原先生のゼミで学ばれた学生は、地域のことをやっておられるわけですよ。

【原】

そうですね。その学生の比率は高いと思います。

【安村】

その学生は公務員だったら地域のことをやりたいし、その能力を持っているでしょう。

ですが、公務員になったらなったで、そういう職に就けるかどうかかわからないですよ？

【原】

そうなんです。そこが公務員の悲しいところですよね。観光振興課に行けるなんて、ワンチャンスかもしれないし、下手するとないかもしれないですしね。

【安村】

観光関係の部署になったらなったで、数年で異動になりますしね。

【原】

そうなんですよ。

【安村】

その辺りを是非、原先生からも官公庁関係に言って頂きたいですね。

【原】

そうですね。特に観光系は、専門人材が必要だと思うので、そういう専門人材を作られませんかということは是非提案したいですね。



【安村】

私が三重県にいた時の県知事が、北川正恭県知事だったかな。革新の知事で、職員がようやく地域のことに慣れてきたら、もう大体3年でローテーションしていたのを、観光振興・地域振興の部署

は、職員を5年動かさないようにした。場合によっては、何年でも居るというようにしたんですね。職員たちがすごく喜んでいたのが印象的だったんです。

【原】

なにかやりたいことをやって成果を出せるところまでいけますよね。だけど、3年だったら育てて収穫できない感じがしますよね。

実現していくとなると、結構それでは事務局どうするんだとかになると思うのですが、香川大学も私たちの経済学部で観光を学ぶ学生もいて社会に出ていくし、地域マネジメント研究科でも観光を勉強したいですとか観光でやりたいですという人たちが多いいんです。

せとうち観光専門職短期大学の先生の中にも、香川大学のビジネススクールに来て学位を取られた先生たちもいて、ネットワークを作れないかなと実は思っ

います。香川大学やせとうち観光専門職短期大学の卒業生もたくさんいらっしゃるの、先生たちだけじゃなくて、現場で活躍されている方と先生たちとでそういうネットワークができると、香川県の強みである観光人材をちゃんと養成できると思います。それに大学院もあります。なんなら博士号も取れますよというのがあって強いんですね。それで専門的なことを学んだ人たちが各界の色々なところで観光人材として活躍してくれて、良い循環が生まれたら理想的だなと思っています。

専門職大学の中で「観光」が入っているのは、せとうち観光専門職短期大学と城崎温泉のある豊岡の芸術文化観光専門職大学ぐらいですね。だから本当にとっても貴重な人材を育成されていると思うので。是非ともそこを一緒にやっていきたいですね。

【安村】

そうですね。それは本当に素晴らしいです。

【原】

県庁にもビジネススクールを卒業した人たちが結構いらっしゃるの、その中で観光部署に来られる人たちもいるので、そういう人たちとも連携できればと思います。

【安村】

観光や地域振興の人材育成プラットフォームみたいな感じですね。

【原】

安村先生のおっしゃる通りです。プラットフォームを作りたいっていうのがあります。実際に社会に出た人たち同士のネットワークです。それは多分、四国の他の県ではできない強みだと思います。

【安村】

それで県でも市でも関わってもらえれば、またそこから色々仕事の道も開けますしね。我々も是非積極的に関与させていただけるとありがたいと思います。是非実現したいと思います。

【内田】

本日は香川大学の原副学長にお越しいただきまして、観光、それから大学について色々なお話をうかがいました。本日はどうもありがとうございました。

【原・安村】

ありがとうございました。

★★★アフタートーク★★★

———人生の転機になった経験は？———

【原】

香川大学に就職したのが1998年で、教員として5年勤めてから、2003年に私は一年間、イギリスのレスター大学に行ったのですが、それが転機ですね。あの頃はまだ大学も余裕があったので、若手の教員を海外で勉強させて、「一年間勉強しに行っていていいぞ」と言われていたんです。それこそ沢木耕太郎世代で、学生時代にバックパック旅行をよくやっていましたが、やはり異国で一年間暮らし、生活を立ち上げることをやらなければいけなくて、あれで何でもできるようになりましたね。

それから、私がお世話になった周りのイギリス人たちは、みんな好きなことをやってたんですよ。

自分自身があまりにも英語ができなくて、最初はそのせいで大学にどうしても足が運ばなくなっていました。それで地図を買って一ヶ月ぐらいフットパスばかり歩いていたら「分からない自分で良いんだ」と思えるようになって、それでまた大学に行けるようになったんです。その時、イギリスの農村を歩いた時の美しさによって、自分自身を見つめ直しました。そして、「こんな自分でも良いんだ」って受け入れられるようになったのは、このイギリスの美しい農村のおかげだという思いがあって、これを日本でも導入したいと思ったんですよ。それで日本に帰って来て、グリーン・ツーリズムの研究を始めました。グリーン・ツーリズムは日本でも1990年代ぐらいから研究が行われていたのですが、香川県ではまだまだそういう推進協議会もできていなかったんです。2003年は転機だと思います。

【内田】

それはイギリスが良かったからですか？アメリカに行っていたら全然違ってたでしょうか？

【原】

そう思いますね。やはりイギリスのあの田園景観ですね。いわゆるカントリーサイドが良かったですね。エンクロージャーの残りがまだあって、生垣があって、パッチワークのようになっていて、あれがすごく良かったと思います。

私が転機になったのは2003年のイギリスなのですが、それまで農業経済史というマイナーな分野を研究していましたので、研究室があるのも東大とか京大ぐ

らいなんです。それなので指導教員から「お前たちは農業経済史では飯を食っていけないから、経済史の先生になるか、農業経済学の現状分析の先生になるかなので、どちらも勉強しておきなさい」と言われたんです。それなので、私は経済学部の日本経済史の大学院の授業にも大学院時代に出席していたし、同じ農学部で農業経済学の現状分析をやっている連中のゼミにも出させてもらって、一緒に農村調査に行っていたんです。ですので「フィールドワークもやれ」と言われた時にできたので、やはり若い時に色々やっていたのは、決して無駄じゃなかったんです。

今はいかに効率よく生きるかという、時々かわいそうになるんですが、小学生のうちから「あなたは何になりたいの?」と答えさせられるじゃないですか。確かなりたいものが明確だとそれはすごく効率的だと思います。同時に、人生の何に役立つかなんてわからないようなことが、どこで役に立つかなんてわからないじゃないですか。あの時「自分はもう経済史一本で生きるんだ」と思ってフィールドワークをやっていなければ、多分フィールドワークはできなかったと思うので、あの時色々やっていたのが今になって役立つというのはありますね。

———これから求められる人材は?———

【原】

一言で言うと、チャレンジできる人材だと思っています。ですが、それはチャレンジできる環境がないとダメだと思っています。それは私たちの責任だと思っています。若い人たちが「チャレンジをして失敗していいんだよ」ということを、大人たちが認めてあげなければいけない。チャレンジできる人材と環境の二つが同時に成り立たないと「チャレンジしなさい」と言われてチャレンジして失敗したら叩かれるのでは、チャレンジできなくなるので私はこの二つだと思っています。地域の方が出る杭は打たれることが強いと思います。東京の方がほったらかしにされると思うので。そういう意味で言うと、私たち自身もそういう跳ね返りみたいな人たちを優しく受け入れて行くという「失敗して良いんだよ」「もう一回またチャレンジしたら良いんだから」と、私たちも言えなければいけないし、その上でチャレンジして欲しい。

【内田】

勝手なイメージであまり冒険しなさそうな、香川大学での20年で学生さんの反応は変わりましたか?

【原】

変わったんですが、平均的に変わったのではなく、多分なんですが、飛び出す人間を認めるようになったという方が正しい感じがしますね。以前の方が、認めていなかったような。

実は今、香川大学には学部を越えた「起業部」というのがあります。大学全体で20人ぐらいの学生がいて、そういう学生がたむろできる場を大学は確保しているのですが、そのうちのほとんどは「もう大学をやめて起業したい」「休学したい」と言っている学生なんです。そういう学生が出てきて一定程度認められるようになってきたと思いますね。

経済学部もいますし、医学部の学生もいるんですよ。創造工学部の学生もいますし、今はITができるというのはすごく強みじゃないですか。それでローコード、ノーコード開発ができるようになってきて、コード開発がそんなに難しくなくなっているんで、だから大体起業をしようというのは割とIT系が多いと思います。

知的財産センターで、大学のシーズと地域のニーズをつなげて共同研究を結びつけるという役割の先生が専門で顧問をしています。他にも東京などに行って一旗揚げてまた帰ってきて、香川県内でご自身も起業している人が結構いるんですよ。そういう人たちに顧問をやってもらって、時々メンターになってもらっています。